

『篁物語』の表現の古態性

－ハ行転呼音を中心にして－

中村 一夫

【キーワード】 篁物語 小野篁集 表記 ハ行転呼音 承空本 彰考館本 古態性

一 問題の所在

平安初期の文人、歌人として才名の高かった小野篁を主人公とする『篁物語』『小野篁集』（作者未詳）は、その成立の時期や経緯、および諸伝本の系統や本文の特質に関して諸説あり、いまだ明確な位置付けがなされないところが残されている。現存する『篁物語』の伝本は、鎌倉時代後期に書写されたカタカナ書きの承空本『小野篁集』（冷泉家時雨亭文庫蔵）が最も古く、それとほぼ同一の本文を持つひらがな書きの宮内庁書陵部本（霊元天皇宸筆本）がある。さらに彰考館蔵の『篁物語』甲本（枅形本）と同乙本（袋綴本、原本焼失）とが知られている。書陵部本と彰考館甲本・乙本はいずれも江戸初期の書写である。これらに加えて、近時、安部（2020）および安部（2021）で、京都大学文学研究科図書館所蔵の二本（以下京大本A・京大本Bと称す）が影印で公開された。いずれも奥書に記されているとおり、近世書写の彰考館甲本および書陵部本の忠実な写本（孫本）であることから、比較的新しいものであることは動かない。

稿者は、中村（2022）で『篁物語』『小野篁集』に使用される漢字を、中村（2023）では上記の伝本に現れる音便形の表記のありようをそれぞれ検討し、安部（2020・2021）によって指摘されたこの物語の伝本の古態性について考察を加えた。写本の書写の状況（空白箇所存在）から本文の古態性・優位性を論じた安部の論考に対し、本文の古態性その他の性質に関わることは本文そのものから導き出されるべきではないのかと考え、拙稿では後世の本文の解釈を示すことになる漢字表記の質、量や規範意識の反映を見せる音便形の表記を判断の根拠にして論じたのであった（注1）。

漢字で書くか仮名で書くか、音便形になるかならないか、いずれの場合でも物語の内容、筋書きの面からは問題にならない。何が書かれているかを取り上げる場合は、表記の差異を異同として見ないことも少なくない。「給」と「たまふ」、「うつくしく」と「うつくしう」、どちらであっても伝えられる情報に変わりはない。

しかし、いかに書くかという表記レベルにまで立ち返った時には、明確に書写意識の差が浮かび上がってくると考えられる。2つの拙稿において、次のような見通しを得た。

1 承空本で使用される漢字の種類（異なり数）の少なさは本文の古態性の一証左と考えられる。

2 音便形が多く使用される承空本の本文は、この作品が成立した平安後期の頃の日本語のありようをよく反映しているのではないか。一方の彰考館甲本では、音便形より元の語形が維持されることが多く、規範性を強く意識している。

本稿では、中村（2022・2023）に続いて、先に提示した各伝本の相対的な関係性（承空本群、彰考館本群の二つのグループ、下記の分類表参照）を踏まえ、本文の表記の面からその特質（古態性）を考察するものである。加えて古態性それ自体を論じることが可能であるかも考えることになるだろう。

【「篁物語」「小野篁集」伝本の分類】

	書名	写本
彰考館本群	篁物語	彰考館甲本・彰考館乙本・京都大学本 A
承空本群	小野篁集	承空本・書陵部本・京都大学本 B

調査する対象は、漢字・仮名や音便形と同様に、書写の際に表記の揺れを生じやすいハ行転呼音である。原本の確認・翻刻・引用は、平林文雄・財団法人水府明德会編著『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字文責・総索引』（2001）および財団法人冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 承空本私家集 上』（2002）に収載の影印を使用した（引用する際には適宜句読点を加えている）。

二 ハ行転呼音とは

平安時代の音変化としてよく知られているものにハ行転呼音がある。ハ行の仮名で書かれた語中語尾の音をワ行に転じて読むようになった音のことである。たとえば「とふ(問)」「かほ(顔)」「あはれ(哀)」などに含まれるハ行音をワ行音(わ・ゐ・う・ゑ・を)に転じて呼ぶ(発音する)ものがそうである。この現象は平安時代の半ば10世紀後半から11世紀前半頃に一般化したと考えられている。変化した後も慣用としてハ行の仮名で書かれており、現代日本語の仮名遣いでは助詞「は」「へ」などに残っている。音韻的には、平安時代のハ行音の音価〔Φ〕(両唇無声摩擦音)が母音の間(語中・語尾)で発音される際に緩みが起き、ワ行音〔w〕(両唇有声摩擦音)となったものである。なおハ行転呼音の名称と概念は、大概

文彦『言海』(1889)の巻頭に置かれた「語法指南」およびそれを単行させた『広日本文典』(1897)に始まるとされている。大概は「仮名ヲ、其本分ノ音ニ呼バズシテ、他音ニ転ジテ呼ブコト」と説く。

ではこのハ行転呼音が古典文学の本文にどう関わってくるのだろうか。釘貫(2023)は「ハ行転呼音は、平安時代末期の文芸作品の語の綴りを混乱させた」と述べる。これは一次資料の写本(あるいはその複製)で文献を読む者には常識的に知られるところである。つまり変化した実際の発音と慣用によって固定化された文字にずれが生じているのである。そしてそのことが規範としてあったはずの表記に揺れをもたらすことになった。「あはれ」を「アワレ」と発音するので「あわれ」と書くようになってしまうということなどである。この現象は『篁物語』においても例外ではない。承空本群、彰考館本群のそれぞれに区分されるいずれの伝本にも見える現象である。ここで承空本および彰考館甲本から一例ずつ示しておく。

〔承〕イフホトニクレニケレハ、ワリコサカシテクワセントスルニ、コノスケヲヤリスクス。

〔彰〕たまほこのみちかむなりし君なればあとはかもなくなるとしらすや

承空本の用例は「食ふ」の未然形「食は」を「クワ」と記述している。ハ行転呼音で発音されたものが文字として表記されている。次の彰考館甲本では「道交ひ」の語末「ひ」がやはり発音されるワ行音に引かれて「ゐ」と書かれている。先の釘貫の言う「語の綴りを混乱させた」の好例と言えよう。なお上記箇所の間同を確認してみると、前者では彰考館甲本は「食はせん」と本来の形になっており、また後者の方の承空本は「ミチカヒ」とこちらも発音に引っ張られることなく元の「ヒ」を書いていた。次章ではこれらがどのように出現しているか、作品全体を俯瞰して考察を加えていく。

三 ハ行転呼音の表記からわかること

ここで承空本と彰考館甲本に出現するハ行転呼音に関わるとおぼしき表記の一覧を示すことにする。中央に校訂本文を記し、その両側に承空本と彰考館甲本の表記を置いた。さらにその外側に付した●は、ハ行転呼音に関わるものと判断した用例である。前の章で引用した2つの用例も右の一覧に含まれている。承空本はカタカナで書写されているが、この表では見やすさを考慮してひらがなに置き換えている。表中の記号であるが、「=」は傍記、「&」はなぞり、「\$」はミセケチである。たとえば最初の承空本の用例は「しう」という本文の「う」の脇に「ふ」と傍記されていることを表し、二つ目は「てふ」の「ふ」は「う」の上からなぞり書きされていることを表している。

この表から見て取れる事実を以下に挙げてみよう。まず●の出現箇所に注目す

ると、両伝本で重なるところが一箇所しかないことに気付く。つまり両本揃ってハ行転呼音に引かれて本来の形を失っている箇所がないのである。しかも承空本群、彰考館本群それぞれの内部では、これらの箇所についてはほぼ異同がない。任意で動いたり動かなかったりするハ行転呼音の出現状況から、これもまた『篁物語』『小野篁集』の写本のグループ化の一証左となるだろう。

	彰考館甲本	校訂本文	承空本	
	しう	衆	しう／う=ふ	●
	て	手	てふ／う&ふ	●
●	こゝろつかい	心遣ひ	心つかひ	
	けうとく	けうとく	けふとく	●
	くは	食は	くわ	●
	すゑ	末	すえ	●
●	みちかゐ	道交ひ	みちかひ	
●	しりこたゑ	しりへ答へ	しりへこたへ	
	ふよう	不用	ふよふ	●
●	かい	甲斐	かひ	
	ねかひ	願ひ	ねかい	●
●	たへいる	絶え入る	たゑいる	●
●	まとゐて	惑いて	まとひいて	
●	うゑ	上	うへ	
	給	給う	たまう	●
●	ふるまい	振る舞ひ	ふるまひ	
	いもうと	妹	いもふと	●
	せう	衆	しふ	●

それぞれの表記を観察すると、同じくハ行転呼音の影響を

受けていると言っても、その性質に違いのあることが窺えるものがある。彰考館甲本の例では「みちかゐ」「しりへこたゑ」「まとゐて」「うゑ」とあり、いずれもハ行をワ行で発音したそのままを記述している。ところが、承空本では単純にハ行をワ行で書くものが「くわ」「たまう」の2例しかない。8例中4例がそうであった彰考館甲本に対し、11例中2例と少ない。ハ行転呼音が広く行われるようになり、おそらくは無意識のうちに発音に引っ張られての表記であろうが、単純に出現箇所が重ならないこと以上に、ハ行転呼音との関わりとの差異に注意させられる。後述するが、素直に変化した発音の通りに記述する彰考館本に対し、承空本のハ行転呼音関係の表記には、後世から見ればより混乱した別の意識が見て取れる。ただし優劣や新旧の指標とは必ずしもならないことは言い添えておく。

両本で同じような形で記述されているものも取り上げておく。承空本では「末(すゑ)」→「すゑ」、「願ひ(ねかひ)」→「ねかい」とする2例、彰考館甲本では「心遣ひ(こころづかひ)」→「こゝろつかい」「甲斐(かひ)」→「かい」、「振る舞ひ(ふるまひ)」→「ふるまい」とする3例である。これらはワ行音での発音通りに書かず、「い」や「え」などのア行音で記してしまっている。たとえば承空本の「ねかい」は「ねかひ→ねかゐ→ねかい」という動きが想定される。なお承空本の「すゑ」は元々が「すへ」ではないため、ここに入れるべきではないだろうが、ワ行音をア行音で記してしまっているという同じ意識が働いているため、ここに並べておいた。

四 語源意識によって回帰するハ行転呼音

では残りの用例を検討する。前章で指摘した承空本の表記からうかがえる「より混乱した別の意識」による記述に関するものである。承空本に11例中5例が現れる形について、以下に検討を加えていく。

〔承〕カクイフ程ニ、人ニクカラヌヨナレハ、イトケフトクナカリケリ。

下線部の形容詞「けうとし」であるが、「う」とあるべきところを「ふ」と表記している。これは「う」の部分を行転呼音によってワ行で記されていると誤解し、「ふ」というハ行に戻しているものである。つまり誤った語源意識によるハ行への回帰になっているのであった。承空本のその他の「不用(ふよう)」→「ふよふ」、「妹(いもうと)」→「いもふと」、「衆(しう)」→「しふ」としているのも同じ意識から書かれたものである。これらの例は前節で取り上げたハ行転呼音をワ行で書くものとは、書写の差異の意識のありようとは明らかに異なるものがあると言えよう。平安時代後期以降に広く行われるようにあったハ行転呼音の通りに記述するのは、ほぼ無意識で行われる可能性が高いのに対し、上記の語源意識によるハ行への回帰は、この種の日本語音の変化を知識として持っていなければできないことである(たとえそれが誤った認識だとしても)。ここからこの伝本の書写に関わった人物の言語意識や知識、教養のレベルを推し量ることができるかもしれない。

彰考館甲本にもこれとよく似た例が1つある。

〔彰〕ときあけてみれば、たへいるけしきをみて、まとあてゝ、ほかのいゑにみにけり。

「たへいる」は「絶え入る(たえいる)」である。複合語の前項は「絶ゆ」であるから、「え」はワ行ではなくヤ行である。ところが、これをワ行音だと誤って解釈し、「へ」とハ行に戻してしまっている。なお同じ箇所¹⁾の承空本の表記も本来のものとは違っている。

〔承〕トキアケテミレハ、タエイルケシキヲミテ、マトヒイテゝ、ホカノイエニキニケリ。

承空本では「絶え入る(たえいる)」のヤ行「え」をワ行「ゑ」と誤っているが、これを「絶へ入る」と誤認し、「へ」をワ行の「ゑ」とした可能性が捨てきれない。もう一例、これは意味を取るのが難しい語であるが、彰考館本群では筆跡を指す「手(て)」とあるところ、承空本では「てふ」としている。しかも「ふ」は最初に「う」と書いた上からなぞり書きをしている。表記という現象面だけ捉えてみるならば、これもまた「う」をワ行音だと誤解して、「ふ」へ回帰させた例だと言えよう。

恣意的に行われることはなく、おそらくはほぼ無意識のうちに記述するのである

うハ行転呼音であるから、両群の本文で重なってもおかしくないのにも関わらず、出現箇所は重ならない。その一覧は第二章で示したとおりである。そして承空本の方に、相対的な違いではあるものの、書写という行為の中に彰考館本群にはほとんど見られない何かしらの言語意識が働いていることが窺える。

五 まとめ

平安時代ではハ行転呼音以外にも日本語音が大きく変化している。以下、釘貫(2023)の指摘である。

平安時代では、ハ行転呼音と並行して、ほかにもいろは歌の体系に触れる音変化が進行していた。すなわち「い (i)」と「ゐ (wi)」が合流して i に、「え (ye)」と「ゑ (we)」が合流して ye (イエ) に、「お (o)」と「を (wo)」が合流して wo (ウオ) に帰した現象である。

ここに見える音はハ行転呼音とも関わってくるものばかりである。長く固定化される文字を使って流動的に変化を見せる音をどう記述するかという判断は、簡単なことではなかっただろう。

なおひとつ。承空が書写した伝本の収められている冷泉家時雨亭文庫には、資経本と呼ばれる一群の写本が収蔵されている。そして承空はこの資経本を親本として多数の写本をものしたとされる。

承空本が資経本の本文を忠実にとどめようとしているのである。(赤人集)

親本である資経本との対比を通じて、承空本は比較的忠実に転写している(家持卿集)

承空本は資経本の忠実な転写本の一つと考えられる。(伊勢集)

解題『冷泉家時雨亭叢書 承空本私家集 上』(2002)

冷泉家時雨亭文庫には資経本『小野篁集』は残されていないようだが、他の伝本の書写状況に鑑みて、承空本『小野篁集』もまたさらに時代を遡る資経本を親本としているのが自然であろう。つまり承空本に現れる表記は、この伝本が書写された鎌倉時代後期をさらに遡る時代の日本語の姿を残していると考えられるのであった。

本稿では本文の異同として現出するハ行転呼音の表記について観察と考察を加えてきた。彰考館本群と承空本群それぞれのおおよその傾向は示せたと考えるが、古態性や優位性という点については、明確なところにはいまだ辿り着けたとは言えまい。ただ彰考館甲本と承空本の書写のありよう(漢字の使用・音便形の表記)を検討するにつけ、承空本群の方により古い時代の痕跡を窺わせていたことから、ハ行転呼音の出現状況もその見立てを補強する一証左として捉えることができる。と考える。

前稿の最後に書いた文言を今一度引いて、稿を閉じたいと思う。

今後まずは『篁物語』『小野篁集』の本文には二つの群があるという事実を抑えて、その上でほとんど異同をみせない両群の本文の質的な差異を、さまざまな観点から測定していくことが肝要であると考え。個々の表現や表記の違いを比較した時に、どちらが古態性を保っているかを判定するのは恣意的なものになりかねない。決定的にどちらかが古態性を持っているといえるような本文ではないと思われるだけに、その判断には慎重でありたい。どこまでも言語的事実を積み上げて考察を続ける必要があるだろう。

注

- 1 安部(2020)は、彰考館甲本・乙本・京大本Aの最末尾文の直前に、およそ二文字文の空白があることを指摘し、これらを一括りにして「末尾有空白系統本」と称した。一方の承空本、書陵部本、京大本Bは最末尾文の直前に空白を持たず、これらをまとめて「末尾無空白系統本」とした。そしてその書写のありようから、前者「末尾有空白系統本」が古態性(後補された痕跡)を保とうとしていることを述べ、そこに伝本の優位性を見いだそうとしていた。しかしながら、空白に対する意識のありようは説明できても、それが本文の古態性にそのまま繋がるものであるのか、後補であることを示す状態を保存していることが本文そのものの古態性まで保証するのか、そして本文の古態性(さらには優位性)は本文そのものから導き出されるべきではないのかなどの理由から、後世の本文の解釈を示すことになる漢字表記の質、量や音便形の表記を判断の根拠にして論じたのであった。

主要参考文献

- 有坂秀世『上代音韻攷』(1955年)
橋本進吉『国語音韻史』(1966年)
築島裕『平安時代語新論』(1969年)
中田祝夫編『講座国語史2 音韻史・文字史』(1972年)
小松英雄『日本語の世界7 日本語の音韻』(1981年)
沼本克明『日本漢字音の歴史的研究—体系と表記をめぐる一』(1997年)
林史典『「ハ行転呼音」は何故『平安時代』に起こったか—日本語音韻史の視点と記述—』(『国語と国文学』1992年11月)
釘貫亨『日本語の発音はどう変わってきたか』(2023年)
安部清哉「京都大学文学研究科図書館所蔵本『篁物語』(影印)とその「末尾有空白系統本」の古態性」(『人文』18号、2020年3月)
安部清哉「変体仮名字母から見た一写本『篁物語』 彰考館甲本 【附載】 京都大学文学研

- 究科図書館所蔵本『小野篁集』（影印）」（「人文」19号、2021年3月）
- 松野彩「『篁物語』成立年代再考—「角筆」を手がかりとして—」（「国士館人文学」第7号、2017年3月）
- 中村一夫「承空筆『小野篁集』による校訂本文作成の試み」（「国士館人文学」第8号、2018年3月）
- 中村一夫「『篁物語』諸伝本の分類と古態性についての試論」（「国士館人文学」第12号、2022年3月）
- 中村一夫「『篁物語』の表現の古態性—音便形を中心にして—」（「国士館人文学」第13号、2023年3月）